

水圧を利用したモモの摘らい

モモの着果管理の中で摘らい（摘蕾）は大きなウェイトを占め、高品質果実の生産に欠かせない作業です。摘らいは短い適期の中で多大な労力を要するためその省力技術が求められており、モモ産地では水圧を利用した摘らい機の利用が普及しつつあります。これは、摘らい用の特殊ノズルから高圧で水をモモの枝に噴射し、その圧力でつぼみ（蕾）を脱落させる方法ですが、一部に、果実表面に障害が発生するなどの問題も指摘されています。そこで、福島県農業総合センターでは、水圧摘らい機を利用したモモの効率的な摘らい法と省力効果を明らかにしたので、その概略を紹介します。

☆ 技術の概要

1. 水圧摘らいの効果は処理時期により異なり、発芽後 15 日を中心に、発芽後 10 日～開花直前で高い効果が得られます。発芽当日や開花期でも実用的な効果が得られます。
2. 水圧摘らいにより、果実の表面に突起や凸凹が生じる果面障害が発生することがありますが、これは摘らい時の物理的振動によるもので、発芽後 5～15 日の水圧摘らいで多くなる傾向があります。葉芽の損傷もありますが、栽培上の問題はありません。
3. 摘らい時の水圧の強さを 4 MPa と 6 MPa とで比較すると、摘らい効果、葉芽の損傷、果面障害発生に差は認められません。
4. 以上のことから、水圧摘らいは、果面障害が発生しやすい時期を避け、発芽期頃か、開花直前～開花期頃に、4 MPa 程度で実施するのが適当です。
5. 水圧摘らいでは、手作業による摘らいと比べ、摘らい程度や着果位置にばらつきがあるので、水圧摘らい後、修正摘らいや摘花、予備摘果等により、着果を調整します。
6. 水圧摘らいに要する時間は、手作業による摘らいと比較して、70～80%削減されます。その後の摘果作業にやや多くの時間を要しますが、水圧摘らいと摘果を合わせた作業時間は、手作業だけの場合に比較して 40～45%削減されます（図）。

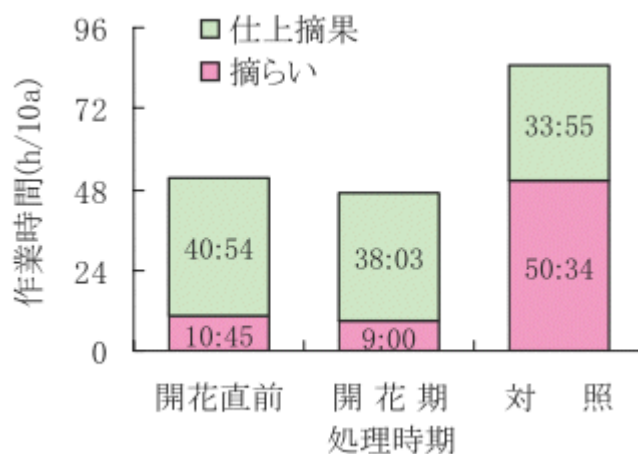


図 水圧摘らいの作業時間

注 1) 対照は手作業の作業時間

注 2) 仕上摘果はいずれも手作業による。

☆ 活用面での留意点

1. 水圧摘らいは、脚立や作業台を利用した作業となるので、作業時の安全に十分注意します。
2. 詳細については、福島県農業総合センター 果樹研究所 栽培科（電話 024-542-4951）にお問い合わせください。

（日本政策金融公庫 農林水産事業本部 テクニカルアドバイザー 後藤 明彦）